

Y4-27

IASCガイドラインとこころのケア

室蘭工業大学 大学院工学研究科¹⁾、
伊達赤十字病院²⁾、
日本赤十字社医療センター³⁾
○前田 潤^{1,2)}、槇島 敏治

【目的】2007年に国連が中心となって作成したIASCガイドライン（Inter-Agency Standing Committee Guidelines on Mental health and Psychosocial Support in Emergency Settings）が発表された。このガイドラインを検証し、こころのケアにとっての今後の課題を明らかにする。

【IASCガイドラインの基本構想】ガイドラインは、支援活動を災害前の準備期、災害直後、中長期という時間軸で整理する。そしてメンタルヘルス及び心理社会的支援活動を核としながら、食料や栄養、避難施設、水や衛生などのあらゆる支援の円滑な提供のための調整活動に重きを置き、心理社会的観点から支援活動を検討することを求める。いうなれば、支援に関わる全ての人々と機関の有機かつ統合的なつながりの形成を求めているのである。

【日本赤十字社のこころのケア】日本赤十字社のこころのケアは、国際赤十字赤新月社連盟のマニュアルに基づいて被災者へのケアと支援者のストレス対処を行うべく、こころのケア教育を行ってきた。地元機関や他機関の連携との連携も視野に入れて研修が行われてきたが、さらに最近では日赤がDMAT研修を実施し、他機関との連携や協力、円滑な支援の提供という点からも重要な心理社会的支援体制の構築への一歩である。

【結論】今後日赤が、積極的にメンタルヘルス専門団体、行政機関や自衛隊、消防、警察など国の様々な支援機関との連携協力体制づくりに取り組むならば、ガイドラインの推奨するこころのケア体制作りをリードし、国際貢献につながると考えられる。

Y4-28

NBC災害における診療放射線技師の役割と問題点

名古屋第二赤十字病院 医療技術部 放射線科
○桑原 和義、駒井 一洋、大保 勇、
瀬口 繁信

【はじめに】原子力発電所、放射性同位元素を使用する施設、テロリスト等放射性物質の関係した災害はいつ起こるかわかりません。これに供えた訓練は災害拠点病院として行っておく必要があります。病院の施設のなかで専門的な知識を有する放射線技師はこの災害時は中心を担うこととなります。当院においては毎年NBC災害における訓練を行っておりN（放射性物質）災害における訓練を行いましたので経験したことをまとめました。

【目的】N災害が起こった場合に搬送者受け入れ訓練を行うことによって、非常時にすみやかに対応できるような体制づくりを行う。特に放射線技師の役割として汚染の拡大防止、その汚染箇所の測定、医師をはじめとする従事者の被曝管理に努める。

【方法】放射性同位元素を搬送中の車両が事故に巻き込まれ負傷者が放射性汚染の恐れがあると想定し受け入れ訓練を行う。1、処置室の養生を行う。2、従事者のアラーム付線量計の準備をする。3、被災者の汚染範囲の測定をGMサーベイメーターを用いて行う。除染作業時に随時測定を行う。4、これに従事した者すべての退出時に汚染の有無の測定を行う。5、処置終了後処置室の汚染箇所の確認を行い、汚染した資機材は汚染拡大防止にこころがけ一時的に保管し事業者に引き渡す。

【まとめ】放射性物資による災害においても通常の災害と同様に被災者の生命がまず優先されるべきである。しかしながら汚染拡大の防止にも努めなければならないので、放射線技師は手際よく作業できるようにしておかなければならない。これには日常より測定器の取り扱いに慣れ、今回のような訓練にも積極的に参加し非常時に備えておく必要がある。